

三笠の山に出でし月かも

平 山 城 児

いわゆる遣唐使の派遣は、舒明天皇二年（六三〇）にはじまって前後十八回計画され、実際には十五回実現した。最後の遣唐使は承和五年（八三八）出発であるから、もはや平安時代にかかっているわけだが、ほとんどの遣唐使は奈良時代に日本を進発したと考えてよいだろう。

その遣唐使一行が体験した海路の苦難や、彼らが将来した多種多様な学問・知識・技術・物品等については、いまさらのべる必要もないだろう。彼らや、彼らに伴って渡来した帰化人たち、それに朝鮮半島から大量に移住して来た帰化人たち、それらの人びとの知能が結集されて、あの奈良朝の文化が形成されたのであろう。

それはともかくとして、私がかねがね不思議にも思い、また残念にも思っていることは、あれだけの艱難辛苦に耐えながら異国へ渡り、人によっては長期異郷に滞在し、再び生死の境いをさまよいながら帰朝した人々が少からずいたはずであるのに、彼らが大陸で作った詩歌や滞在旅行中の記録が、ほとんど残されていないということである。

往復した人々がいずれも文才に乏しい無粋な官人ばかりだったというならば諦めもつくが、山上憶良・藤原宇合・阿部仲麻呂・菅原清公・最澄・空海・円仁といった、文筆の世界ではそれぞれ当代一流の、なかには当時世界一流の文人もいたのである。この中で、入唐求法巡礼行記を残した円仁を唯一の例外とすれば、これら当時一流の知識人たちは、だれ一人として、その往復の体験記録を残していない。そればかりか、彼らが在唐時に作った和歌・漢詩の類いさえ、現存するものは極めて寥々たるものにすぎない。

遣唐大使のクラスは別としても、留学生や留学僧のクラスであった当時の彼らは比較的な若かった。見聞する事

物がたとえ平凡なものであっても、一々新鮮な感動を起こしやすすい年齢のものが、言語に絶する航海や大陸での生活から受けた印象というものは、おそらく強烈なものであったに違いない。それにもかかわらず、彼らはそうした感動については、ほとんど語ってくれなかった。

万葉集には四千五百首中、在唐中によまれた歌というものは、周知のように、次の憶良の歌一首のみである。

山上臣憶良在_二大唐_一時憶_二本郷_一作歌

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待恋ひぬらむ(巻一・六三)

そうした意味においては、この歌はまことに貴重であるが、それにしても、日本が恋しいというだけのこの一首しか、在唐中の和歌が残されていないというのは、どう考えてももの足りない。彼らは異国で見聞した事物や感じた心境を、実際にも歌によまなかったのだろうか。あるいはよみえなかったのだろうか。

ここで、そうした疑問に連関して想起されるのは、卷十五前半に収録されている遣新羅使一行の歌群である。天平八年(七三六)四月に任命され、六月に出発した一行は、万葉集に収められているような歌をよみつつ新羅へ渡ったが、帰途はあまり幸せではなかった。すなわち、大使の阿部継麻呂は対島で死亡し、副使の大伴三中也病氣になり、二カ月後でなければ帰朝報告ができなかったのである。

これらの歌は、歌としてそれほど高く評価されていないが、遣新羅使一行という、特殊な集団による旅の歌として、やはり珍重すべきものである。しかし、ここでも、私の先ほどの嘆きはくりかえされるのであって、彼らは、往路対島までは綿々とそのセンチメンタルな思いをのべた歌を多数よんでいるにもかかわらず、それより先、つまり、朝鮮半島に上陸してからそこを離れるまでの行程では、ただの一首も作品を残さなかったのである。そして最後に申訳程度に、瀬戸内海にたどりついた時の歌を五首並べて終っている。彼らは、朝鮮半島という異郷では、歌はよまなかったのだろうか。それとも、よみえなかったのだろうか。

憶良が遣唐少録として、大宝二年(七〇二)六月に出発した時、大通事として伊支古麻呂が、学問僧として道慈・弁正が同時に渡唐している。この三人はそれぞれ懐風藻の作者である。そして、珍重すべきことに、道慈と弁正には在唐中の詩が残されている。

五言。在唐奉本国皇太子、一首、积道慈

三宝持聖徳。百靈扶仙寿。寿共日月長。徳与天地久。

五言。与朝主人。一首。积弁正

鐘鼓沸城闐。戎蕃預国親。神明今漢主。柔遠靜胡塵。琴歌馬上怨。楊柳曲中春。唯有関山月。偏迎北塞人。

五言。在唐憶本郷。一絶。积弁正

日辺瞻日本。雲裏望雲端。遠遊勞遠国。長恨苦長安。

道慈は十六年在唐し、養老二年（七一八）に帰国した。多治比県守、藤原宇合らと同時に帰つて来たわけである。「本国皇太子」は、おそらく聖武天皇を指すのであろうが、おめでたい文字が並んでいるだけで、あまり面白い詩ではない。この詩を作つた道慈が、もし帰国以前にこれを他人に托したとすれば、おそらく、慶雲元年（七〇四）か慶雲四年（七〇七）に帰国した、その時の遣唐使の一行によつてであらう。

一方、弁正は帰国しなかつた。最初の一首は王昭君あるいは和番公主の事蹟をふまえた作品らしいが、日本古典文学大系本の補注によると、この「朝主人」は、朝衡すなわち阿部仲麻呂である可能性も考えられるようである。もしそうであるとすれば、仲麻呂が渡唐した養老元年（七一一）以後の作品ということになる。だが、私が求めているのは、こうした作品ではない。この作品は、日本人（弁正はもともと帰化人系ではあるが）がわざわざ作らなくとも、中国人が自在に作りうる種類のものである。私が求めているのは、日本人が日本人として受けとめた異郷の描写、あるいはそこでの感慨をのべた作品である。

その意味では、弁正の二番目の作品は、まさにそれにあたるといふ。しかし、伝記にも、「性滑稽。善談論。」ともあるように、また、この作品が、同字をいくつも重ねて使用するという、極めて技巧的な作品でもあるところから、彼が、本心「長恨」をいだいて「長安」に苦しんでいたか即断することはできない。この詩はもつと軽い戯れである可能性が強い。万葉集全釈は、この題詞が、さきの憶良の歌の題詞と似通つた書き方をしているところから、あるいは同時に作られたものかと推測しているが、そのような空想もしたくなる。さらに、その憶良の歌を原文通りに途中まで書いてみると、「去来子等早日本辺大伴乃御津乃浜松……」となり、憶良が「ヤマト」を「日本」と表記したのは、

この歌と日本挽歌だけであることを考えあわせると、この弁正の詩が、ひとえに戯れの詩ではなくて、憶良と同じような望郷の思いをこめた作品であると考えてもよいような気がする。

さて、養老元年（七一七）三月に出発した遣唐使は、実に錚々たるメンバーであった。押使の多治比県守、副使の藤原宇合、学生の玄昉・下道真備・阿部仲麻呂という陣容である。このうち、県守と宇合は一年後に帰国したが、玄昉・真備は十七年目の天平六年（七三四）になるまで唐に滞在している。仲麻呂はもちろん帰国しなかった。

県守は万葉集に名を留めるのみで、歌も詩も残していないので、おそらく文人ではなかったのだろう。しかし、帰朝した時に唐服を着て拝謁したというのであるから、大変ハイカラぶった帰朝者であった。⁽²⁾旅人が大宰帥に任せられた時、入れかわりに大宰大式の職を終えて帰京する県守によんだ歌（巻四・五五五）に、いかにも友情があふれているところを見ると、旅人とは親交があつたらしい。

宇合は、懐風藻の作者の中で、私が最も愛する詩人である。概して単調でたどたどしく梓にはまったような作品の多い懐風藻の中で、彼の作品はとりわけ生氣躍動している感がある。天平初期に日本を襲った天然痘のために、ほかの藤原三兄弟とともに早死してしまつたのは、彼の才能にとつて惜しみても余りあることである。「学は東方朔に類ひ、年は朱買臣に余る。二毛已に富めりと雖も、万巻徒然に貧し」とか、「行人一生の裏、幾度か辺兵に倦まむ」とか、彼はしきりに内心の鬱憤を作品に吐露しており、そこがまた私の好むところだが、またまた残念なことに、在唐中の作品は残されていないのである。彼はまた万葉集の作者（短歌六首）でもあるが、そこにも異国での体験はもらされていない。

玄昉と真備、ことに真備は、相当な学者であつたことは解るが、彼らも在唐中の直接の体験感慨については、何も残してくれなかつた。

そして、阿部仲麻呂である。仲麻呂は、のちの空海とともに、当時の唐の知識人たちをも驚倒せしめたほどの才人であつた。仲麻呂は遂に帰国できなかつたが、彼の行動については、幸いにかなり知ることができる。旧唐書に、「慕^二中国之風、因留^一不去」と書かれているように、同行して十七年も長期滞在した玄昉・真備とも共に帰国せず唐に留まつた。天平十一年（七三九）に帰国した平群広成の報告によると、漂流して帰国の便を失つた彼らを、「本朝

学生阿部仲満」が紹介の労をとったことがわかる。天平勝宝四年（七五二）、大使藤原清河、副使大伴古麻呂、同吉備真備というメンバーで遣唐使が派遣された。それまで、栄叡・普照らのすすめで日本へ渡ろうとして、すでに五度の渡航に失敗し、失明をした鑑真をたずね、天平勝宝五年（七五三）十月十五日、清河・古麻呂・真備らとともに、「衛尉卿安部朝臣朝衡」が揚州へ行き、六度目の渡航をすすめている。この結果、鑑真は、古麻呂とともに、天平勝宝六年（七五四）、ようやく日本へ渡ることに成功するのだが、仲麻呂と清河は安南へ漂着して帰国できない。⁽⁵⁾ 宝龜元年（七七〇）三月、新羅使の報告に、「在唐大使藤原河清、学生朝衡等」の故郷への便りを托されたので持つて来た⁽⁶⁾とある。この便りの内容が伝えられていたら、さぞわれわれに感動を与えたであろうと思われるのだが、悲しいかなそれは伝わらない。そして、宝龜十年（七七九）四月に入朝した唐使が、仲麻呂の死を伝えた。⁽⁷⁾ つまり、それよりるか以前に、仲麻呂は在唐したままかの地で死んだのである。さきに玄宗に仕え、のち肅宗に仕え、旧唐書によれば、上元年間（七六〇—）「左散騎常侍鎮南都護」になったと記されている。全唐詩には、王維・包佶・儲光義の、李白全集には李白の、それぞれ仲麻呂に贈った詩があるほどで、彼は当時一流の唐詩人たちにもその才能を愛されていた。

仲麻呂には決して帰国の意志がなかったわけではない。天平勝宝六年（七五四）の際も、明らかに帰国するつもりで船に乗ったのだが、漂流して果さなかったたのである。文苑英華に収められている仲麻呂の詩は、一方では中国に後髪を引かれながらも心は日本へ向かっているという、一種複雑な心境をよんだもので、そういう意味では、まさに私の求めていた種類の作品である。

衛_レ命使_二日本_一

衛_レ命将_レ辞_レ国

非才忝_二侍臣_一

天中恋_二明主_一

海外懷_二慈親_一

伏奏違_二金闕_一

驂駢去_二玉津_一

蓬萊鄉路遠

若木故国鄰

西望懷恩日

東歸感義辰

平生一宝劍

留贈_二結_レ交人_一

中間の五連の句は、ほぼ対をなしているが、そのそれぞれが、一方は中国のことを言い、一方は日本のことを言っている。そして、その両方に心をひかれてある作者の心は、両方に引きさかれている。つまり、ここには、長く滞在することによって深いつながりが出来てしまった中国と、もともと血のつながりのある、忘れようにも忘れられない日本とが、同じ比重で作者の心の中に重くのしかかっているわけで、仲麻呂のような才能をもち、仲麻呂のような体験を経た人間には共通する悩みではあつたらうが、それが真に象徴的に表われているといつてよいだろう。

ここで、古今集の、あまりにも有名な歌を引用しなければならぬ。

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲磨

あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

この哥は、むかしなかもろこしにものはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへて、えかへりまうでこざりけるを、このくにより又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、いでたちけるに、めいしうといふところのうみべにて、かのくにの人むまのはなむけしけり。よるになりて月のいとおもしろくさしいでたりけるをみて、よめるとなむかたりつたふる

仲麻呂の歌はこの一首が伝わるのみであるにもかかわらず、この歌が後世にもはやされたことは一通りではない。古今六帖・新撰和歌・和漢朗詠集・新撰髓脳・古来風体抄・秀歌大体・百人秀歌・百人一首などにそれぞれとられてはばかりでなく、もっと後になって、烏丸資慶が、道真と並べてこの歌を、「鬼神感じ、天地動ず」(資慶卿消息)と賞讃し、田安宗武が、「ゆるやかにして意深く、かつながれたることつゆなくしておもしろくぞ侍る」(臆説刺言)と評しているなど、枚挙にいとまがないほどである。

また、土佐日記の承平五年正月二十日の条にも、この歌が引かれていることは周知の通りだが、やや状況説明が違うので、煩をいとわずに、その部分全体を引用したい。

はつかの、よのつきいでにけり。やまのはもなくて、うみのなかよりぞいでくる。かうやうなるをみてや、むかし、あべのなかもろこしといひけるひとは、もろこしにわたりて、かへりきけるときに、ふねにのるべきところに

て、かのくにひと、むまのはなむけし、わかれをしみて、かしこのからうたつくりなどしける。あかずやありけん。はつかの、よのつきいづるまでぞありける。そのつきはうみよりぞいでける。これを見てぞ、なかまろのぬし、「わがくにかかるうたをなむ、かみよりかみもよんたび、いまはかみなかしのひと、かうやうにわかれをしみ、よろこびもあり、かなしびもあるときにはよむ。」とて、よめりけるうた、

あをうなばらふりさけみればかすがなるみかさのやまにいでしつきかも

とぞよめりける。かのくにひと、きゝしるまじくおもほえたれども、このころを、をとこもじに、さまをかきいだして、このことばつたへたるひとにいひしらせければ、こゝろをやきゝえたりけん、いとおもひのほかなんめでける。もろこしとこのくにとは、こととなるものなれど、つぎのかげはおなじことなるべければ、ひとのこゝろもおなじことにやあらん。

古今集の左注に比べると、この土左日記の文章の方がより説話的であるということはいえる。しかも、肝心の歌も、第一句が「あをうなばら」となっている。古今集よりも土左日記の方が成立は後であるし、土左日記は現実をふまえた作品とはいえず、一種の創作でもあるから、紀貫之は、土左日記に書く場合には、伝承にも手を加え、歌そのものをも改作したと考えられないこともない。たしかに、土左日記の中の仲麻呂の言葉には、古今集仮名序を書いた貫之の面目が躍如としているようでもある。しかし、もし、この歌が海辺ではるかに日本を望んでよまれたものならば、第一句を青海原とよみはじめることは、むしろ自然な気もしてくる。さらに、見送りの唐人たちが漢詩を仲麻呂に贈り、仲麻呂が同じく漢詩を返したことは事実でもあるし、その時仲麻呂が日本語の歌をよみ、それを漢字に置きかえて唐人に示したことも、あながち貫之の創作とも思えない気がする。そのようなわけで、私は、なんらの確証もないが、この土左日記の文章を、ほぼ信じたい気持でいる。

さて、古今集の左注に「このくにより又つかひまかりたりける」という使を、天平勝宝四年（七五二）に出発した、藤原清河ら一行としている説があるが、おそらくはそうであろう。もしそうとするならば、仲麻呂が日本を離れたから三十五年目になる。それはよいとしても、同じく左注の中の「めいしう」、すなわち明州という地名が気になつてくる。唐大和上東征伝には、なるほど明州という地名は出てくる。

又経五日、有邏海官来、問消息、申牒明州、州大守処分、安置鄞県山阿育王寺、寺有阿育王塔、明州旧是越州之一県也、……

とある部分である。しかし、この部分では、まだ清河たちは中国へ到着していない。鑑真たちは、この後移動して明州を離れ、北上して揚州へ戻っている。鑑真に、清河以下一行と朝衡（仲麻呂）が逢ったのは揚州であり、そこから揚子江を下って蘇州（黄泗浦）へ寄り出発している。だから、いずれにしても、明州には寄らずに彼らは日本へ向かったのである。明州は遣使船航路上も、その後の通商航路上も重要ではあるが、鑑真渡航の際の事実とは異なる。その点が少し気になるのである。こだわったことを言えば、古今集の左注にはやや具体性が乏しいにもかかわらず、「めいしう」という固有名詞がはいっているのは、一見事実らしく見せるための技巧なのではないかと言いたいのである。

万葉集中に、「天の原ふりさけみれば」という語句をふくんだ歌を探すと、それほど珍しい言いまわしではないことがわかる（巻二・一四七、巻三・二八九、三一七、巻十・二〇六八、巻十三・三三八〇、巻十五・三六六二、巻十九・四一六〇の七首）。作例は天智皇后倭姫王から、山部赤人、遣新羅使、大伴家持などに時代的に幅広くわたっていて、決して偏った表現ではない。ただし、仲麻呂渡唐以前の作品だけにしぼるならば、次の二首に限られるだろう。

天皇聖躬不予之時太后奉御歌一首

天の原ふりさけ見れば大君のみ命は長く天足らしたり（巻二・二四七）

間人宿弥大浦初月歌二首（の内）

天の原ふりさけ見れば白真弓張りてかけたり夜路はよけむ（巻三・二八九）

巻十三の年代推定はむずかしいところなので、参考までに、その歌も挙げておく。

わが背児は待てど来まさず 天の原ふりさけ見れば ぬば玉の夜も更けにけり……（巻十三・三三八〇）

次に、「みかさやま」とよんだ歌は集中三首あり、「みかさのやま」とよんだ歌は集中十三首ある。都が平城京に遷ってからは、三笠山はとりわけ親しまれた山の一つであろう。そして、「春日なる三笠の山」という語句をふくんだ歌は、全部で四首ある。わずらわしいが、その歌も全部列挙しておく。

春日なる三笠の山に月の船出づ遊士あそびこの飲む酒坏あそびに陰に見えつつ（巻七・二二九五）

春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山に咲ける桜の花も見ゆべく(卷十・一八八七)

雁が音の寒く鳴きしゆ春日なる三笠の山は色づきにけり(卷十・二二二二)

春日なる三笠の山に居る雲を出で見るごとに君をしそ思ふ(卷十二・三三〇九、悲別歌)

この四首はすべて作者未詳で、しかも年代推定のむずかしい巻に属しているので、軽々しく言うことはできないが、興味深いことには四首中二首までも旋頭歌であり、その旋頭歌のいずれもが、三笠の山から出る月をよんでいることである。もし、これらの歌が養老元年(七一七)以前の作であるならば、仲麻呂がこれらの歌も脳裏に浮かべながら、あの歌を作ったとしても、少しも不思議ではない。

それでは、仲麻呂が異郷にあって本国を思う歌を作ったとき、なぜ「春日なる三笠の山」という場所を思い浮かべたのだろうか。

続紀の索引を引いてみると、「みかさやま」は、次の二箇所にのみ出てくる。

養老元年二月壬申朔。遣唐使祠^(六)神祇於^(六)蓋山之南。

宝龜八年二月癸酉朔戊子。遣唐使拜^(六)天神地祇於春日山下。去年風波不^(六)調。不^(六)得^(六)渡海。使人亦復頻以相替。

至^(六)是副使小野石根重脩^(六)祭祀一也。

いずれも遣唐使が渡航前に航路の平安を神祇に祈願している記事であり、養老元年二月一日の条こそは、仲麻呂も加わった遣唐使に関する記事であるから、この場に仲麻呂がいたことは、ほぼ確実だろう。

しかし、この件については、板橋倫行氏の指摘がある。つまり、仲麻呂の歌に「春日なる三笠の山」とあり、遣唐使が「蓋山之南」に神祇をまつたということから、従来は漠然と現存する春日神社をそれにあて、そこで遣唐使たちつまり仲麻呂もそこへ祈願をこめたのであらうと考えられている。現に、古典文学大系本の「古今和歌集」の頭注には「今の奈良市の東部、春日の地にある御蓋山。春日山の一峯で、山腹に春日神社がある」とある。ところが、現在ある春日神社が創建されたのは、通説によっても神護景雲二年(七六八)で、板橋氏の引用した宮地直一・福山敏男両博士の説によっても、精々天平勝宝年間(七四九―七五七)にまでしかさかのぼれない。そして、板橋氏は、それ以前には、春日の地には、藤原氏の祭る神ではなくて、巨勢津姫神・巨勢大明神をまつた榎本社があり、元来は

巨勢氏の祭る神であつたらうとする。さらに、例の遣唐使が祈願をこめたのは、「臨時に祭場を構えて祭つたまでで、固定的な神社の存在を主張するものではなからう」とする。

このようなわけで、仲麻呂が祈つた「蓋山之南」なる所も、そう單純に春日大社と同一視するわけにはゆかないようである。しかし、その時仲麻呂が祈つた神がなんであらうと、「蓋山之南」で「神祇」をまつたことは確かである。仲麻呂が異郷にあつて、しかもまさに帰国の途につかんとする時、やはり航路の平安を神祇に祈りたく思つたであらうし、三十五年前、未知の航海への恐怖を神に祈つて出発の決意を固めた時点を想起したのは、極めて自然な心の動きといえるのではないだろうか。そして、折しも、その時と何ひとつ変らぬ月が、三笠の山からではなくて、一望千里の青海原からのぼってくるのである。

ここでまた、板橋倫行氏の説を紹介しつつ、それに若干の小説的空想をつけ加えながら、この仲麻呂の歌の周辺をさまよつてみたい。

養老元年（七一七）に阿部仲麻呂が遣唐使の一行に加わつて日本を離れた時、羽粟吉麻呂という僱人が従つていた。彼は唐へ着いた翌々年、つまり養老三年（開元七）、唐の女性と結婚し、翼・翔の二子をもうけた。吉麻呂は二子を連れて、天平六年（七三四）に帰国した。その時翼は十六歳であつた。聡明であつたので父親は彼を出家させたが、それにしても、あまりにも優秀であつたため、その才能を惜しんで朝廷が彼を還俗させた。⁽⁹⁾

天平八年（七三六）六月に出発して翌年の正月に帰国した遣新羅使の一行は、例の万葉集卷十五の前半に歌を残している人々だが、その中に次の一首がある。

都べに行かむ船もがかりこもの乱れて思ふこと告げやらむ（三六四〇）

右一首羽粟

この左注の「羽粟」については、すでに代匠記が統紀の天平宝字五年（七六一）十一月三日の条の記事を引き、「若此翔ニヤ」と指摘している。その後さまざまの説が出されているが、決定的な説はない。六国史索引のすべてを通じて、この羽粟（あるいは、葉粟）の姓をもつ人物は、翼と翔と、もう一人乙貞と三人しか見あたらない。この乙貞という人物は、斉衡元年（八五四）正月八日に、無位から従五位下に叙位のあつただけが知られる人物だが、

翼との関係で言えばあまりにも年齢が開きすぎているので、子供ではなくて孫であろうと思われる。翼の子が女子ばかりであったので、その子の代になって、ようやく乙貞という男子が生まれたのかもしれない。だから、奈良時代の正史に名のあらわれている人物のうちのだれかを、この万葉集巻十五の羽粟にあてるとすれば、翼か翔しかないということになる。

吉麻呂の、この二人の子の命名については、青木和夫氏が、すでに「翼とか翔とかいう名のつけかたにも、一介の儼從吉麻呂の望郷の想いがこめられているようである」とのべているが、私もそれには同感である。「翼があれば翔けて帰りたい」という気持であろう。だが私には、ここにもう一段飛躍した空想があるのである。吉麻呂は確かにそうした気持でわが子に命名をしたのであるうが、それでは、なぜこのように一字名前の、意味が相通ずる名を二人に与えたのだろうか。ひよっとすると、この翼と翔とは同時に生まれた双生児だったのであるまいか、というのが私の空想である。

ともかく、遣新羅使の一行に、翼か翔が加わったことは、かなり可能性が強い。もしそれが翼であったなら、その時十八歳であった。どちらにしても混血児であったから、通訳の役目を立派に果たしただろう。

天平宝字三年（七五九）二月、前回の遣唐大使藤原清河を迎えるための使船が出発した。その一行に録事として羽粟翔が加わったが、翔はそのまま帰国しなかった。

一方、翼の方はその語学の才能もかわれたのであろうが、位も正七位上から外従五位下に官も遣唐録事から准判官に格上げされ、臣という姓も賜わり、すっかり儀容を整えた上で、宝龜八年（七七七）六月に遣唐使の一行となって渡唐する。帰国したのはその翌年か翌々年のいずれかであるが、宝龜十年（七七九）三月には従五位下に叙せられている。この年、彼は四十二歳であった。

翼は医薬のことと暦法に詳しかったらしく、帰朝早々、宝応五紀曆経を携えて進言し、日本では天平宝字七年來、儀鳳曆をやめて大衍曆を採用しているが、現在唐ではすでに大衍曆は用いず、この経を採用していると言った。結果的にはこの暦法は採用にならなかったらしいが、いかにも新帰朝者らしいハイカラな進言である。その後の翼の官位を追ってみると、桓武朝の延暦年間、彼はずっと内葉正兼侍医であったらしい。ほかにも丹波介・左京亮・内蔵助な

どを兼ねてはいるが、専ら本業は医薬のことに従事したらしい。そして、延暦十七年（七九八）五月二十七日、六十一歳で死んでいる。

それから四十年の歳月が流れて、承和五年（八三八）六月、最後の遣唐使船が出発した。その一行の一人である円仁は、貴重な記録、入唐求法巡礼行記を残したが、その巻二に、円仁が登州の開元寺に立ちよった時の記述がある。時に開成五年（承和七年（八四〇）三月七日のことである。

七日王押衙宅裏齋、此開元寺仏殿西廊外僧伽和尚堂内北壁上画西方淨土及補陀落淨土、是日本国使之願、即於壁上書着縁起、皆悉没却、但見日本国三字、於仏像左右書着願主名、尽是日本国人官位姓名、録事正六位上建必感、録事正六位上羽豊翔、雜使従八位下拳育、雜使従八位下白牛養、諸吏従六位下拳海魚、使下従六位下行散位次同度、倭人従七位下建雄貞、倭人従八位下紀朝臣貞次尋問無人説其本由、不知何年朝貢使到此州下、この文章の中にある、「羽豊翔」が羽栗翔であろうと指摘したのが板橋倫行氏である。また、「使下従六位下行散位次同度」は、「使外従五位下」の誤写で、この二字の欠字は「高元」とあるべきで、この人物が、天平宝字三年（七五九）に出発した迎入唐大使使の高元度であろうとしたのも板橋氏である。もっとも、その後福山敏男博士から訂正があり、板橋氏も、「使外従五位下散位助高元度」とあったに違いないと同意している。

かりに、この壁画の署名が天平宝字四年（七六〇）にされたとするならば（なぜなら、高元度はその翌年には帰国しているから）、円仁が見た時、すでに九十年以上も経過していたわけであるから、字がかすれて判読不明になっていたのも無理はない。

阿部仲麻呂を中心にして、八世紀中に往復した遣唐使たちによって残された在唐中もしくは、その往復の途次に作られた作品の探索は、ほぼこれで大体を尽したことになる。実際には、八世紀最後の年、宝龜十年（七七九）に淡海三船によって書かれた、唐大和上東征伝があるわけだが、それには意識してふれなかった。三船は思託の草稿に基づいて、自らは航海の経験がなかったにもかかわらず、天与の文筆の力で、あれほど生々とした記録を書いたのである。円仁の記録とともに、遣唐使の記録としては双璧であることは疑いない。そのほか、続日本紀・日本後紀・類聚国史などに断片的に残された遣唐使の報告の記録も、もちろん散文で残された貴重な記録であろう。しかし、私がこれま

で多くの紙面を費して求めていたのは、散文韻文を問わず、当時の人々が異郷にあつて、異郷をどう受けとめ、またどのような気持で旅をし学問を続けていたかという、個人的な感慨であつた。そうした感慨をかすかに洩らした作品も僅かに残されていたが、それはあまりにも少かつた。彼らが、現実に異国でさまざまな思いにふけり、感動を覚えたとあろうことは、人間である以上当然であらう。それにもかかわらず、そうした意味での作品が、極く僅かしか残されていないということは、失われた部分が多いというよりは、元々彼らにそうした意味での作品がなかつたのではないかと思われる。この後、空海という才人が大陸へ渡り、帰国して活躍する。残された文章の量を見れば、空海は非常に筆まめな人であつたらしい。あれだけの筆力を持ち、あれだけ筆まめであつた空海が、なぜ在唐中の日記を残さなかつたのだろうかと考えると不思議でならない。しかし、もう一層深く考えてみると、空海の残した文章というのは、ほとんどが公的な文章と言へる。書簡にしても、今日のわれわれが友人同士で交わす、しまりのない告白めいた私的書簡のようなものはない。そもそも近代人的な意識を空海の文章に求める方が誤りなのだらう。空海はあれだけ大量に自筆の文章を残していながら、そこから空海の伝記を組み立てるのが困難であるという最大の理由はそこにあるのだらう。

このように考えてくると、仲麻呂の残した極めて僅かな作品には、かすかではあるが、近代人の告白めいた私的な感慨が吐露されているので、やはり私には貴重である。八世紀の人々が、もし現実に私的な感慨をこめた作品を残さなかつたとするならば、彼らがそれを残せなかつた理由のひとつに、日本語表記上の不備を挙げておいてもよいだらう。漢字を用いて散文を記すことはまだ容易であつただらうが、いろいろな制約のある韻文を作ることはむづかしかつた。ともすれば、中国の古典の名文句をつづりあわせて、別の似たような内容の詩を作るのが精一杯であつた彼らが、その漢字を自由自在に使いこなして、内心の鬱屈をはき出すのは困難であつただらう。

それならば、和歌はどうであらうか。仮名の発明以前と以後とでは、確かに和歌の質も変わったが、だからといって、万葉集四千五百首に私的感慨の吐露がないという人はいないだらう。表記上の障害はこの際問題とはならないが、おそらく、和歌が日本語でよまれるというところに問題があつたのだらう。万葉人はかなり勇敢で、懐鼻・女餓鬼・法師・檀越・無何有乃郷・婆羅門などという言葉も和歌にとり入れていたが、それらは、ほとんど戯れの歌であ

る。異郷の地にあつて見聞するものすべてが日本にはないものの場合、それらの単語を和歌にとり入れてよむ勇氣は、なかなか出ては来なかつただろう。こうした事情は近代になつてもそれほど解消はしない。たとえば、鷗外が明治三十八年六月に満洲でよんだ歌に、次のようなものがある。

泥みづに車軸漬ぢぬ穹古塔や冷湯の夏に似たる市なか

これは特に極端なまでに固有名詞をよみこんだ歌を選んだのであるが、遣唐使たちももし唐土の風景らしい歌をよもうとしたら、あるいはこのような感じの歌を作つたかもしれない。しかし、彼らはそうした冒険はしなかつただろう。和歌はあくまでも日本の風土に密着したものと意識されていたのだろう。だからこそ、遣新羅使の一行も、対島を出て日本へ帰るまでは、かの地の風景を歌によまなかつたのであり、遣唐使たちも、かの地では歌はよまなかつたのであろう。

古今集の仲麻呂の歌が、実際にかの地で仲麻呂がよんだという保証はない。あるいは伝承された別人の、しかも日本国内でよまれた歌が、仲麻呂の伝承と結びあわされたのかもしれない。しかし、少くとも言えることは、あの歌が、貫之の時代の歌ではなく、万葉時代の歌であるらしいことである。また、仲麻呂に関する伝承も、(土左日記も含めてであるが)、まだかなり正確に伝わっていたことがわかる。江談抄になると、荒唐無稽な説話となつてしまふ。中国との交通が途絶えたことが、仲麻呂を鬼形に変えてしまつたのである。

- 注(1)
- | | | | |
|------|--------------------------|------|---------------------------------|
| (1) | 統紀天平九年正月二十七日の条。 | (11) | 統紀天平宝字三年正月三十日の条。 |
| (2) | 統紀天平九年三月二十八日の条。 | (12) | 統紀天平宝字五年十一月三日の条。 |
| (3) | 統紀養老三三年正月十日の条。 | (13) | 統紀宝龜六年八月二十九日の条。 |
| (4) | 統紀天平十一年十一月三日の条。 | (14) | 統紀宝龜七年八月八日の条。 |
| (5) | 唐大和上東征伝天宝十二載十月十五日の条。 | (15) | 三代実録貞観三年六月十六日の条。 |
| (6) | 日本逸史延暦二十二年三月六日の条。 | (16) | 統紀延暦五年七月十五日の条など。 |
| (7) | 統紀宝龜元年三月四日の条。 | (17) | 類聚国史 仏道十四還俗僧。 |
| (8) | 統紀宝龜十年五月二十六日の条。 | (18) | 「登州開元寺壁面に名を留めた万葉歌人」(『万葉集の詩と真実』) |
| (9) | 「万葉集と春日神社」(『万葉集の詩と真実』所収) | (19) | 『うた日記』 |
| (10) | 類聚国史 仏道十四還俗僧。 | (20) | 江談抄 第三 吉備入唐聞事。 |
- 『日本の歴史(3)』(中央公論社)